縁もあって目と鼻の先にありながら、直接に会ったり見たりできないことは何とももどかしい。私にとっての大韓民国…。普段は儚い電波を頼りに思いを馳せるばかりだ。

日本に独特のユーモアで知られた内田百閒という作家がいる。『阿房列車』の作品の冒頭は「なんにも用事がないけれど、汽車に乗って大阪へ行って来ようと思う」汽車に乗ること自体が目的という珍奇な行程で、到着したら何もせずにとんぼ返りで戻って来てしまう。私などにはとても考えられない。ひとたび出掛けたら土地の文化を楽しみ、おいしい食事を味わいたい。悠久の歴史を誇る韓国は、まさに打ってつけの国なのだ。

機会を得て行くことができたなら、普通であれば旭日昇天の勢いで飛行機に乗り込む。忘れてはいけないことはないか。ラジオ韓国やＫＢＳの古い日本語リスナーには聖地があることを。「玄海灘」だ。福岡から船が出ているので、両国に架かる虹が当日も立つことを期待して、霧笛が胸を刺すと『トラワヨ　プサンハンエ』で歌われた釜山港から入りたい。私の名前を漢字で書くと南に上で南上だけれど、今回の旅は北上することを考えている。

行きたいところを挙げていたら切りがない。予定を詰め込むと変わったコースが閃いてきた。釜山を後回しにして慶州へ向かい世界遺産である良洞民族マウルへ直行する。時間が許すならば仏国寺にも参詣しよう。発展を続ける韓国の原風景を抑えてから各地を巡る。

急いで釜山に舞い戻ったら梵魚寺の閉門に間に合うだろうか。私の通った中学と高校は日本の古都、鎌倉五山の第一刹である禅寺の建長寺が作ったものだ。韓国禅宗の総本山と聞いて素通りはできまい。釜山タワーまで足を伸ばして夜景を楽しんだら踵を返して東菜温泉へ向かおう。日程は強行軍だ。一日目から骨を休めておきたい。

二日目は新しく開業した釜山―金海軽電鉄に乗って空港へ。東岸をひと息に襄陽国際空港へ降り立つ。変わり行く2018年の冬季オリンピック開催地の江原道の今を見ておきたいのだ。もうひとつに欠かすことのできない目的がある。松茸祭りに参加して生松茸を食べたい。なかなか口にすることができない食材は垂涎の的だ。洛山寺で山から海を見下ろす眺望も堪能したら光州へ本日2度目のフライトだ。本当は江陵まで行って本場のスンドゥブも試したかった。私の進んだ明治大学は昔から今に至るまで韓国の留学生が多く在籍していて、あるチェーン店が大学ごとにふさわしい丼ご飯を考案したところスンドゥブが選ばれたくらいだ。アリランの郷や海列車にも後ろ髪を引かれるけれど仕方がない。西南方面への光景を俯瞰しながら、しばらくの休息としよう。

光州でもキムチ大祝祭で舌鼓を打ち、扶余の百済文化団地に遊ぶ。日本とも関係が深かった古代の都を再現したテーマパークは急ぎ足でも見ておきたい。最終目的地はソウルと決めている。ちょうどアルファベットの「N」を左右対称にしたようなコースをたどっていることになる。少しだけ近づいておくために2泊目は大田の奥座敷、儒城温泉に宿をとりたい。連夜の温泉は身も心も癒してくれることだろう。温泉街は独自の空気を持っているものだ。雰囲気に浸ることも趣きがある。

3日目はＫＴＸで一路ソウルへ。日本でいえば新幹線になる高速鉄道に乗ることは興味津々である。最初に話した作家のことを、あながち悪く言えないかもしれない。韓国の諺に「行く言葉が美しければ、帰る言葉も美しい」というものがあると聞いた。戒めとしなければなるまい。

ソウル駅に着いたら乗り換えなければいけない。板門店には行っておきたいのだ。国情というものは一面だけを見るだけではわからない。さまざまな状況を知ってこそ、両国の理解は深まる。

夕食は宮中料理レストランに行きたいと思っている。私の大学時代の友人の母親は王室で出された料理を一般に伝える家庭に育った。話を聞きながら、いずれ口にしてみたいと考えていたのだ。日本の新聞でも紹介されたことのある名店だそうで、宮中飲食研究院では指導も行なっているらしい。

「食は文化なり」と日本では言われている。気候や風土、歴史が形作るものだからだ。土地や人々を知ることができる。温故知新の例えのように、脈々と受け継がれてきた味は韓国を一身に感じさせてくれるだろう。

お腹を豪華な料理で満たして、名残惜しくも旅は幕を閉じる。韓屋にも泊まりたかった。アリランを聞きたかった。欲張りな妄想を抱きつつ、またもや全線開業したてのA'REXに酔い心地で身を委ね、世界最高空港の勲章を持つ仁川国際空港を後にする。窓からは光輝く街並みが感傷を誘うだろう。東京までの空路を考えるとき、ほぼ全国を周れたことに気づくかもしれない。